

同 放射線科 安森弘太郎
村中 光, 篤海良彦
肺悪性腫瘍の縦隔及び胸壁への浸潤の評価は, 従来の撮像法のCTでは必ずしも十分なものとはいえない。超高速CTを利用した動態検査は従来のCT撮像法と比較して縦隔および胸壁への浸潤および癒着の有無の診断において有用であると考えられた。今回, 従来の撮像法および超高速CTを利用した動態検査を実際の症例を呈示しながら, 比較, 検討する。

33. 転移性肺腫瘍のCT所見と病理組織像の対比

産業医大放射線科 中川 徹
内田和彦, 平方敬子, 中田 肇
同 第2外科 安元公正
すでに剖検伸展固定肺におけるHRCT所見と病理組織所見の関連について報告したが, 今回は肺転移手術例について検討した。対象は1991年4月から1994年12月まで, 転移性肺腫瘍として手術を受けた20例(原発: 腎癌8例, 肝癌3例, 大腸癌3例, 乳癌2例, MFH2例, 肺癌1例, 喉頭癌1例)である。結節の辺縁のCT所見を4型に分類し, 病理組織所見と対比検討した。手術例でもCT所見と組織所見の関連が示唆された。

34. 検診発見肺癌切除例の検討

長崎市立市民病院外科
中田剛弘, 井上啓爾, 小原則博
同 内科
木下明敏, 須山尚史, 中野正心
過去5年間に, 当院で施行した原発性肺癌手術症例98例を対象とし, 発見動機別に, 年齢, 性別, 腫瘍径, 組織型, 病期分類等を比較した。検診例は, 39例(40%), 他疾患経過中30例(30%), 自覚症状例29例(30%)であった。検診群では, 他群にくら

べて, 病期分類I期及びT₁症例の占める割合が高く, 性別に差を認めず, 腫瘍径は小さいものが多く, 組織型では, 腺癌が85%と高率であった。しかし, IV期症例も13%に認められた。

35. 胸部検診要精検により精査後の経過観察症例の検討

熊本市民病院呼吸器科
松木美才, 田中不二穂
米良昭彦, 浦本秀志, 今村文哉
福田浩一郎, 岳中耐夫
杉本峯晴, 志摩 清
胸部検診要精検の経過観察状況を調査し, その問題点について検討した。

1993, 94年の2年間に胸部検診要精検にて当科を受診した472例中49例が精査の結果, 経過観察となった。49例中31例は陈旧性炎症としながらも肺癌を否定できないため経過観察となり, うち肺癌1例を含んでいた。49例中17例(35%)が患者自身が受診しなかった経過観察途絶例であり, 経過観察には細心の注意を要する。

36. 胸部症例の過去のフィルムをふりかえって

国立南九州病院放射線科
向井浩文
鹿児島大放射線科 野口一成
中條政敬
同 第1外科 下高原哲朗
西島浩雄
青山病院 森山高明
過去のフィルムが入手可能であった悪性例46例(原発性肺癌44例, 胸腺腫2例)中24例(52%)において, 過去のフィルムに明らかに陰影が描出されていた。診断の遅れの理由は, 単なる見落とし例が9例, 経過観察例が8例, 結核等の別の診断名がつけられた症例が7例, 本人受診せず2例で, 今後診断能力が

向上すれば改善される要因が多かった。陰影の存在部位は, 上肺野が13例と最も多かった。

37. エンドキサン大量投与が有効であった難治性小細胞肺癌の1例

九州大胸部疾患研究施設

高梨伸子, 高山浩一, 犬塚 悟
八並 淳, 中西洋一, 原 信之
症例は, 41歳女性。小細胞肺癌, LDの診断にてPE療法2コース並びにPEと放射線の同時併用療法1コースを受けたがPDであった。末梢血幹細胞採取は不能であったため, 自家骨髄移植を併用し, CPA 4g/m², ACNU 300mg/m², epi-ADM 100mg/m²による大量化学療法を行ったところ, 原発巣と経過中出現した肝転移巣は著明に縮小し, 重篤な合併症は認められなかった。エンドキサン大量投与は難治性小細胞肺癌に有効な治療法である可能性が示唆された。

38. 化学療法の経過中に気胸を繰り返した肺小細胞癌の1例

大分医大第2内科

三重野斉, 水之江俊治
仲間 薫, 河野 宏, 山崎 透
橋本敦郎, 後藤陽一郎
那須 勝
今回我々は肺小細胞癌に対する化学療法の経過中に, 腫瘍による気管支狭窄によって生じたCheck-valve機構により末梢部位に形成された気腫性病変の破綻による発生と, 既存するブラ, プレブの, 化学療法の副作用として発生したと思われる嘔吐により生じた胸腔内圧上昇による破裂という二つの異なる機序により繰り返し気胸を併発したと考えられる1例を体験したのでここに報告した。